

[鼎談] 堂本印象美術館 リニューアル記念

三輪晃久 日本画家(京都府立堂本印象美術館館長)
島田康寛 神戸市立小磯記念美術館館長
森井士朗 (株)たづアート取締役会長



京都の西方を走る「きぬかけの路」は金閣寺から龍安寺、仁和寺へと延びる観光道路。その道沿い、衣笠山麓の「京都府立堂本印象美術館」は、今年4月12日、リニューアルオープンします。これを記念して巨匠・堂本印象の画とその人となりについて、同美術館館長の三輪晃久氏と前・館長の島田康寛氏、そして画廊・たづアートの森井士朗会長が語ります。

多彩な画風はあくなき挑戦の足跡。今こそ、印象のメッセージに耳を澄まし、目を凝らすとき。

■ 図案で築いたデザイン力とスピード

森井◎今日は、堂本印象の芸術と生き方、とりわけ京都という町に印象が果たした役割などについて現・堂本印象美術館館長・三輪晃久先生と前・館長の島田康寛先生に語っていただくことで、画商として私もまた、印象芸術の意味と価値を再確認したいと思っています。

三輪◎印象は上京区の造り酒屋の三男として生まれました。美術工芸学校に通っていた頃父親が亡くなり、すでに家を出ていた2人の兄に代わって一家の大黒柱となりました。

そこで、三越図案部に入って図案の仕事をし、その後、龍村織物に移籍して帯や着物の図案を描いていました。

島田◎その頃、後に国画創作協会を立ち上げる野長瀬晩花と交流があり、花街やカフェに通い、文楽や歌舞伎にふけるなど、“真面目に”遊んでいます(笑)。デカダンというか、ちょっと退廃的な生活をして、竹久夢二めいた絵を描いていますね。そういう側面も持ち合わせた上で、売れる図案を人の何



もりいしろう=1941(昭和16)年生まれ。同志社大文学部卒。70(昭和45)年(株)たづアート設立。78(昭和53)年画廊たづ開廊。93(平成5)年京都画商相互会会長(98年第2期)。

倍もの速さで仕上げていくし、後には仏画も描いていく。そんな印象にあるじの龍村平蔵が目にかけて、給料を払いながら京都市立絵画専門学校(現・京都市立芸術大学)への入学を許すのです。印象はそれを恩義に感じ、大家となっても龍村の仕事はその頃と同じ図案料しか取らなかったそうですよ。

森井◎龍村さんとしては売れっ子デザイナーを失うことは痛手だったはずですが、それよりも堂本三之助(印象)の才能を信じた。その時の図案家としての経験がデザイン力とスピードを養い、画家・堂本印象の礎を築いたとも言えますね。あれほど多彩な画風の作品を膨大に残した画家はめったにいない。

島田◎染織や陶磁器、漆器などの図案を描いていた人が後に大きな芸術家になっていくケースは、京都ならではの感がありますね。

三輪◎実は私が高校生の時、油絵に魅力を感じ、進路について印象に相談

をしたことがあります。そのとき「日本画や」と一言でした。その一言にものすごいオーラがあって、私は日本画科へ進んだのです。また、ある時、6号サイズの絵を見てもらったのですが、制作に5日かかったと言うと「これくらいの絵ならさっと描け」と言われました(笑)。とにかく、スピードを重視しましたね。そして「絵描きなら何でも描けんとアカン」とも。実際、印象は超人的なスピードで何でも描きました。

■ 仏画にこめた信仰心と芸術への挑戦

森井◎印象の画の多彩さは有名ですが、特に宗教的絵画に思い入れが強く、印象芸術がいよいよ佳境に入っていく中期には仏画に没頭された時期もあり、京都の多くの寺院の障壁画を描かれましたね。

三輪◎もともと、信仰心の強い人で、両親の影響もあったと思います。「無神論者だと言っても、誰でも人は精神的なよりどころを求め、もっているはずだ」と。モチーフとしての仏ではなく宗教心から入っていく人でしたから、仏画を描く前に経典を読んだり、水垢離をしたりしていました。印象が34歳のとき、帝展に出品した「華嚴」は、経典をひもいって悟りにたどり着くまで50幾つものシーンに描き分け、中心に阿彌陀如来を描いた大作です。この作品で帝国美術院賞を受賞し、寺院からの注文が入るようになったようです。

島田◎由緒ある寺院の襖絵や杉戸絵を描くことで、印象の画業と名は揺るぎないものとなりました。最晩年に描いた、法然院の襖絵「静風自來」などは、日本画と洋画、抽象と具象、伝統と革新といったあらゆる対立概念を超越した、悟りにも似た心境を感じることが出来ます。

三輪◎「日本画や」と言った印象の言葉には、そういう日本画の可能性を探れという意味が含まれていたのかもしれない。

島田◎昭和28年頃、印象は抽象画に取り組んでいます。欧州を旅して美術館や画廊を見て歩き、教会や遺跡などをスケッチし、帰国の翌年には「メトロ」や「窓」など世間を驚かさすような洋画的作品を発表しています。さらに、「新造形」と呼ばれる一連の抽象画を発表しておきながら、「これからは洋画だ」とは言わなかった。印象はやはり、抽象であれ具象であれ、日本画による美を追究した画家だったと思います。

森井◎渡欧された頃は、すでに印象といえば大画伯。にもかかわらず、全く新しい世界、新しい表現方法に挑戦している。また、大作を描きながら抽象画も描くし、頼まれればバラの絵なんかも同時に描く、いったいどういう人だったの

でしょう。島田◎60歳代後半からパリやニューヨーク、トリノなどで個展をしています。全部新作です。しかもその間、教会の壁画や寺院の襖絵なんかも描きながら…。ちょっと不思議な画家ですね。

三輪◎不思議といえば、印象の師・西山翠嶂が「あれだけの仕事を一人の画家がなとげる」とことや「仕事の疲れもみせない」と、そして「仕事が終わると、また新しい次の道をせせと歩いている」とことなどについて「不思議な人」と言っています。そのエネルギーの秘密というか、根底にあるのは信仰心ではないかと思えます。

島田◎そして、芸術家の信念と創作意欲でしょうね。物を創り出すこと、美を創造することへの情熱を抑えられなかったのだと思う。しかも、その情熱は絵画だけでなく、建築にまで及ぶのですから、驚異的です。

■ あくなき想像力と願いをこめた美術館

森井◎堂本印象美術館ができたのは1966(昭和41)年。印象画伯75歳の時です。まさにこの美術館こそが印象芸術。今も多くのファンが支える京都の芸術の拠点ですね。

三輪◎建物のフォルムはもちろん、ドアの取っ手や窓枠など、細部に至るまで下図が残っていて、印象の思い入れの深さが伝わってきます。自分の絵を鑑賞してもらっただけでなく、日本画の発展を願い、京都に還元したいという思いで、京都に建てたことに意味があります。

島田◎衣笠山に建ったときは、物議を醸したようですが…。



みわ・あきひさ=1934(昭和9)年京都市生まれ。57(昭和32)年に日展初入選。58(昭和33)年京都市立美術大(現京都市立芸術大)日本画科卒。堂本印象に師事する。日展と堂本印象が主宰する東丘社展を主な発表の場とする。現在、日展評議員、京都市立堂本印象美術館館長、東丘社代表。



しまだ・やすひろ=1945(昭和20)年奈良県生まれ。関西学院大学文学部美術学科卒。京都国立近代美術館勤務を経て、立命館大学文学部教授、同大先端総合学術研究科教授を歴任。2012(平成24)年まで堂本印象美術館館長。現在、神戸市立小磯記念美術館館長。専門は近代絵画史。

三輪◎「金閣寺ができたときも、平等院ができたときも、同じく世間からケツタイな建物だと思われただろう。しかし、新しいことは誰かがやらねばならない」と印象は言っています。そういう革新性こそ、京都が重んじる伝統です。伝統とは革新が積み重なったものですから。そんな印象の願いを継承すべく、リニューアル後も新しいことに挑戦していきたいですね。たとえば、京都が生んだ画家たちと印象の作品とを合わせた展覧会とか、文化勲章を受章した京都の画家と印象との作品展とか…。この4月からは竹内栖鳳など受賞者5人と印象という風にね。

森井◎本当に京都は芸術の宝庫ですから、ぜひ次代を担う若い世代が育ってほしい。堂本印象美術館がその拠点となって、ますます京都の芸術の発展にお力を注いでいただきたいと願っています。本日はありがとうございました。

企画・制作=京都新聞COM

Advertisement banner for the exhibition '京都画壇の巨星たちI' (Part 1) at the renovated Impression Museum. It includes the dates 2013年4月12日(金) - 5月26日(日), the title '美の巨匠一堂本印象', and the venue 'たづアート 画廊 たづ'.

美の巨匠一堂本印象



堂本印象「蓬萊清明」軸60.5×49.5cm



堂本印象「松下狗子」軸130×42cm



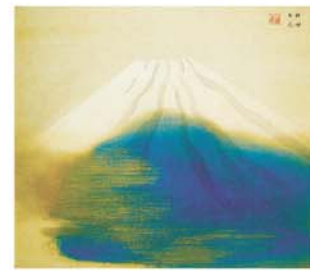
堂本印象「清夏」軸36.5×41.5cm



堂本印象「春水ながれる」3号



堂本印象「紫の幻情」39.5×32cm



堂本印象「雲峰」10号



堂本印象「春匂う丘」10号



堂本印象「菖蒲」10号変

株式会社 たづアート 画廊 たづ

〒605-0037 京都市東山区三条通神宮道西入西町138-1 たづアートプラザ1F 営業時間/AM10:00~PM6:00 日・祝日定休 TEL.075-771-8225 FAX.075-771-1004 [HP]http://tazuart.com/